

魔法科高校の益良雄

霖霧露

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法が科学の延長線上にある世界・『魔法科高校の劣等生』。ここに転生するのは、特徴がないことが特徴と言わんばかりの少年。もちろん、彼は転生特典を貰う。

下らぬ特典ならば踏み台たる『弱者』の話。強いだけの特典ならば無双するだけの『強者』の話。だがこれはとある者に憧れを抱く『益良雄』の話。『英雄』に憧れ、『蛇』を尊ぶ少年の話。

目次

第1話	益良雄	1
第2話	川村家と吉田家、まだ千葉家を 名乗れない鹿取家令嬢を添えて	8
第3話	俺はそうして一高に通うことに した	15
第4話	達也の奇妙な運命（必然）	25
第5話	隣の司波は青い	35
第6話	間の悪い間違い	53
第7話	幹木にまさる梢木なし	74
第8話	バーボンハウス	80

第1話 益良雄

「転生特典持ちの神様転生モノだよ（半ギレ）」

「全くの真顔で『かつこはんぎれかつことじ』って発音してるのですが」

「神様転生の序盤のテンプレは全カットな流れなのね」

神様より転生特典を貰い受けた俺氏こと今世での氏名『川村英人』は今世での実家『川

村家宅』の自室で、オレンジ色の頭髮で白を基調とした服装の見た目JCと赤紫色の頭

髪で黒を基調とした服装の見た目JSにそんな第一声を投げかけた。

ということなんで君たちが俺の転生特典である『will・c021』と『闇理ノア

レ』で違うのか。あとファミチキ下さい。

（こいつ、直接脳内に……いと、ウィル子は『will・c021』で間違いないのです

よ、マスター）

「わざわざ『レイセン』『マスラヲ』であつた脳内会議を試したかつたのね。私も閣下が

望む通りの『闇理ノアレ』よ」

何という事でしょう。ウィル子はネタで応えてくれるし、ノアレはこちらの意図を讀

み取って解説までしてくれる。

控えめに言って完璧だ！『川村英雄』^{かわむらヒデオ}の親しき友人であり、カミと呼ばれる存在である電子のカミ・ウィル子と闇のカミ・ノアレを俺自身が迎え入れることに成功したのだ！我が世の春が来た！

「マスター、『控えめに言って』から『我が世の春が来た』まで筒抜けなのですよ……」
そう呆れないでほしい。俺自身もテンションが高いことは分かっているが本当に君たち二人には相当憧れていたし、川村ヒデオに対しては尊敬もしていたんだ。

林トモアキ原作作品は前世の俺にとって愛読書と言っていい代物であり、その内『戦鬪城塞マストラ』と『レイセン』は特にお気に入りだった。

「一樣言っておくけど、私たちの能力は完全再現されてないし、私たちの存在はこの世界のルール準拠よ」

「それはしつかり神様から聞いてるよ。というか、お前たち二柱はカミなんだから如何に転生モノで毎度おなじみのご都合主義な神様でも無理があるだろう」

神といえど同列以上のカミは生み出せないわけで、彼女ら二柱の能力が弱体化する旨は事前に聞いていた。

「そもそも『O1能力』や『眠り続けるものの召喚』なんてこの世界でもチート過ぎてて使えない。『億千万の電脳』^{スカイネット}とノアレの基本スペック+ α だけでも十分反則なんだからな」

対価さえ払えば如何なる電子機器でも創造する能力も、あらゆるエネルギーを無に還すまで消えない闇の召喚権も持ったところで色々怖くて使えたものではない。と言っても、あらゆる電子機器を支配する神器と物質・物理エネルギー・魔法的エネルギーを消去する能力も十分に強すぎる。だからこそ『転生特典』なのだが。

「そういえば気になっていたのですが、この世界はどういう世界なのですか？」

「この世界にも魔法が存在して、それが科学的に解析され始めているっていうのは知ってるし、『十師族』とかの世界常識も知ってるけど。さすがにどういうライトノベルの世界かは知らされてないわよ」

どうやら彼女たちは神様あたりからこの世界の基礎知識はしつかり知らされているようだ。説明の大部分が省けて大変楽である。一から十までとか言われたら日が暮れる。

「この世界の名前は『魔法科高校の劣等生』。科学的に魔法が証明された世界で、日本の魔法師評価基準からズレた天才の劣等生が送る高校生活って感じかな。私的なジャンル付けとしては『近未来ダークファンタジー』だな」

絶対お前劣等生じゃないだろうってチート主人公『司波達也』^{しばたつや}が、妹とともに社会の裏のドロドロした現実的な何かに巻き込まれるパッと見不幸属性すら付与されてるんじゃないかと思ってしまう青春高校生活の物語。

『魔法科高校の劣等生』

「高校生活ってことは、閣下は原作前スタートってことかしら」

「たしかに。マスターどう見ても中学生ですね」

そう、俺の姿はどう見ても中学生なのである。

「12歳の中学一年生だな。えーと、西暦はつと。2092年、原作3年前スタートか」
ついでに日付は7月30日。夏休み中だ。因みに、俺自身この世界で川村家長男として12年間生きた記憶が植え付けられている。世界5分前仮説状態である。

「2092年で中1だから。たしか、主人公と同学年になるか」

「あら、見事に原作に巻き込まれそうね。閣下」

「マスター、原作改変ですよ原作改変！ウィル子達の力をこう、ドバーつと使って原作ブレイクですよー！」

暗黒微笑と無邪気な笑顔。対照的でありながらどっちもぶっ飛んでいる。さすが元暗黒神の端末と元超愉快型極悪感染ウィルスだ。

「俺としては原作に干渉はしたいがブレイクまではしたくないな。色々と面倒だし。後、人死にが稀によく発生するし、主人公も普通に人殺すが。俺は絶対に人殺しはしない。お前たちを、絶対に人殺しには使わない」

「へえ〜……」

「ウィル子としては、その心遣いは大変ありがたいのですよ」

片や試すような、悪魔のような視線。片や見守るような、女神のような微笑み。

「俺にとつて君たちは川村ヒデオからの、憧れの主人公からの借り物だ。俺は川村ヒデオのようになりたいし、君たちとは友達で在りたい」

川村ヒデオは、ウィル子達を道具のように使つてはいなかつた。彼はあくまでウィル子達に友達として力を貸してもらつていただけなのだ。俺は彼のようにになりたい。誰よりも他人に優しく、精霊とすら友好を育み、命が奇跡であることを知るがゆえに殺生を嫌う彼のような、そんな『英雄』^{ヒーロー}のような人間に俺はなりたいたいのだ。

「それで、友人で在りたいとかいいながらすまないが、君たちには多分に力を貸してほしいとも思っている。残念ながら無力な俺じゃこの世界で、彼のようになるどころか不殺も生き残ることも難しいと思う」

この世界は割とシビアだ。藪を突けば良くて蛇、悪くて鬼が出る。そんな中、転ばぬ先の杖すら用意できない無力な子供一人ではたやすく死の運命を手繰り寄せることになりかねない。

「だから、どうかこのどこぞの馬の骨に力を貸してくれ」

二柱のカミに祈りを捧げる。こちらから捧げられる贄はほとんど用意できないと理解しながら、ただ愚かにもカミの恩恵を授かりたいと縋るのだ。友情なんてものをかぎ

しながら。

「いいですよ」

「いいわよ」

「割と軽い!？」

二つ返事でカミの恩恵を貰えるとは思ってなかった俺としては大変驚愕である。

「にほほほほ。カミとして祈る信徒には応えるのですよ。それに、ヒデオはウィル子
がウエルカムなのに全然頼ってくれなくて。ウィル子にとって最愛の使徒なのですが、
それだけは不満だったのですよー」

「私はあなたが自らトラブルに向かつて行って、面白おかしく巻き込まれてくれればそ
れで満足よ。それに、ヒデオ閣下とは違って私たちはあなたの転生特典。正式に契約してい
るようなものなのだから、そう見捨てたりはしないわ」

伊達にヒデオの友人たちではない。伊達では彼の友人は務まらなかったのだろう。
彼の意志に当てられ続けたこの二柱は言動や行動が如何に悪魔的でも、その実、心優し
い精霊なのだ。

「ありがとう。これからよろしく頼む」

「はい、マスター」

「ええ、閣下」

『魔法科高校の益良雄』は、ここから始まるのである。

この物語は、運命に翻弄される『劣等生』の物語でも、運命に阻まれる『優等生』の物語でもない。まして、運命を己が望む未来に書き換える『英雄』の物語でもない。

この物語は、運命に立ち向かう、『益良雄』の物語である。

第2話 川村家と吉田家、まだ千葉家を名乗れない鹿取家令嬢を添えて

2092年8月某日

どうやら俺の家系『川村家』は精霊魔法を扱う古式魔法師の家系だったようだ。川村家の蔵には、精霊魔法に関して記された書物が多く貯蔵されているのをその蔵の中で確認した。

（古式魔法師の家としては随分と新しい家みたいです。他の古式魔法師の家はその歴史が2000年越えなんてざらの様なですよー）

（たったの80年程度、ほぼ最新の古式魔法師の家系みただけ。随分と面白いことになってるわね）

俺がウィル子達と一緒に確認している古式魔法師として認められてからの家人を記した家系図、その天辺には『川村英雄』と記されていた。因みに、俺の曾祖父にあたるようだ。

「この世界にヒデオが存在したことになってるのか。どっちの原作でもありえない話だから、神様による俺の存在の辻褃合わせるところか」

俺が転生特典として授かったウィル子とノアレ。この世界では神霊とされる存在である二人と、もしぼつと出の何の魔法師の家系でもない少年が契約していたら。十師族と古式魔法師による少年を奪い合う大乱闘スマッシュブラザーズの開催である。

「例え歴史が浅かろうが、魔法師の家系でさえあれば後盾か」

多少心もとなないモノではあるが、より強固な後盾を得る前の保険としては十分だろう。

「サー、これ！これはとつても面白そうなのですよー！」

『英雄武勇伝』ですつて。ぷくくつ、どんな面白い武勇伝が書かれてるのでしょうか。ねえ、陛下」

二人が実体化して何やら黒歴史のノートのようなものをこちらに差し出した。

今ここで語るべきことかは分からないが。マスターや閣下ではヒデオ本人と被つていて紛らわしいし、俺としてはヒデオと同列なんて烏滸がましいのでサーと陛下に呼び方を変えてもらった。

「分かったから、読むから実体化は出来れば控えてくれよ？」

神霊が実体化してるところなんて見られたら大変な騒ぎになる。神霊だと思われなくても彼女たちの見た目は幼いので大変な騒ぎになる。

(サー、イエツサー！なのですよー)

(分かつてるわよ、陛下)

彼女ららは俺の願いを聞き入れ、本来彼女らがいる領域・神霊の住む現実とはフィロタのようなモノを1・2枚挟んだ領域に引っ込んだ。

……なんじやこの本は。

差し出された本を開いてみれば。武勇伝とは名ばかりに、この世界の川村英雄に関する伝聞が箇条書きのような状態で記されていた。

第三次世界大戦時に日本防衛のため軍に協力すること数度・対馬奪還作戦にも協力し見事奪還・その後も対馬防衛 e t c .

これ、控えめに言って護国の英雄なのでは？

(写真を見る限り完全に年取っただけの閣下ね)

(こっちのマスターは随分と表立った活躍をしていたのですね)

書物にはしっかりその武勇伝が偽りでないと最低限証明する写真が散りばめられていて、ノアレが言った通り我らが川村ヒデオのしわが所々に見える白髪の色が映されていた。少し猫背ではあるが、見た目の年の割には背筋が伸びている。

そして、その武勇伝の項が終わった後には、彼が使っていたとされる魔法が記されている。

電子機器のハッキング・影を生み出し、それに触れたものの消失・銃器の創造及び破

壊・未知の金属の創造。

これ、ウィル子でノアレでマックルでエリーゼなのでは？

お分かりいただけただろうか。なんと、この世界のヒデオは完全体・英雄ヒデオなのだ。原作全盛期も超えているもはやチーターである。

（私が引くくらいチーターね。チートなんて恥ずかしくないのかしら）

止めてくれノアレ。その言葉は俺に効く。

現・転生チ特典持ちの転生者ターに理不尽な言葉の暴力が襲う。

（おほほほほ。御免あそばせ、チーター陛下）

流れ弾と思いきや割とわざとっぽい。

（マックルも能力が使えて、エリーゼとも契約してたととなると、流行りのチート主人公みたいなのですよ）

それ、マストラヲ終盤の時点で（俺に）言われてたことだから。まあなんにせよ。これならウィル子やノアレの力を使っても、ヒデオの子孫である俺の魔法つてことで通せるかもしれない。

（無茶苦茶なごり押しのががするのですが）

（その理論が通ったとしても、陛下が厄介な連中に目を付けられるわね）

……言うな。

ノアレの予想が容易に想像できて、俺の今世がストレスでマツハなことに気付いたのだった。

「英人ー！幹比古君とエリカちゃんが来てるわよー！」

蔵の外から母の呼ぶ声がある。どうやら俺の友人たちが遊びに来たようだ。

「今行くー！」

読んでいた書物を元の位置に戻し、俺は蔵を出た。



「はい、クツキー」

所々近未来な技術が見え隠れしているが、畳が敷かれていて全体的に古風な日本家屋を思わせる俺の自室。友人らと囲むちゃぶ台に、母は手作りのクツキーを添えた。

「ありがとう、母さん」

「ありがとうございます、幸恵ゆきえ叔母さん」

「おいしくいただきます、幸恵さん」

「ふふ、こゆつくりどうぞ」

上から俺・幹比古・エリカの反応である。母は俺の自室から退室した。

さて、先ほどの幹比古の発言から分かる通り。俺の母は幹比古の父・吉田幸比古よしだゆきひこの妹・川村幸恵（旧姓・吉田）。つまり、俺は原作メインキャラである吉田幹比古と従兄弟なの

だ。家が近所でもあるため仲の良い幼馴染なのである。因みに、エリカとは幹比古からの2年前に紹介される形で出会った。

「月並みな挨拶だが。二人とも元気だったか?」

「あたしは特に事件に巻き込まれず元気よ?」

「僕も元気だったけど。事件と言えば、沖繩と佐渡で大きな事件があったね」

元氣というには裏腹に、そう述べる幹比古の顔は少し青い。

大亜細亜連合による沖繩海戦と新ソビエト連邦による佐渡侵攻事件。どちらもまだ終結して2週間と経っていない。

(陛下は起こると知ってて干渉しなかったのかしら?)

……。

(陛下?)

(サー?)

忘れてたんだよバカヤロウ。原作開始から3年前だからと油断してて、そういえば原作追憶編とか語られてる設定とかでそういう事件があるの完全に忘却の彼方だったんだよ……。仕方ないじゃないか。だって追憶編で細かく描写された沖繩海戦ならまだしも、佐渡侵攻事件はあんまり言及されてないんだから。俺は悪くねえ!俺は悪くねえツ!

(陛下……)

(サー……)

見るなよ。そんな可哀想な生物を見る目で俺を見るなよ……。

「あくあ、あたしもそこにいれば活躍できたのになあ」

「中学生の僕らじゃ高が知れてるし、巻き込まれたらただじゃすまないんだ。あまりそういう言葉は、つてどうしたの？英人」

ウイル子たちの憐みの視線にしよぼくれていた俺に気付いたようだ。人が居る前でウイル子達との会話はこういう事態が起こるので怖い。

「い、いや。離れるとはいえ二つの事件か一気に起こって怖いと思つてな。ちよつと不謹慎だけどさ、ここらへんでああいう事件が起きないでほしいなつて」

「そうだね。そもそも事件なんてどこでも起きなければいいんだけど」

自然に流せたようだ。その話題に乗って平和を噛みしめるとともに、今後何事もないうことを幹比古と一緒に祈った。

その後は他愛もない世間話や女子がいるとは思えない馬鹿話で盛り上がり、楽しい時間が過ぎていった。

第3話 俺はそうして一高に通うことにした

2093年とある春の日

「……準備は良いな」

俺の父・川村英明ひであきは川村家の道場にて、真剣な視線で俺を射抜いていた。

「ああ、いつでも良いよ。父さん」

特化型CADを道場の中央に向ける。未だそこは何もない虚空であるが、俺はそこに呼び起こされる事象に対処するため構えていた。

「ではー」

父は腕にはめた汎用型CADを操作し、魔法を発動する。道場の中央に火の玉が生成された。これは川村家の精霊魔法によるものだ。

ノアレ、頼んだ。

(仰せのままに、陛下)

俺がCADの引き金を引くと、闇が火の玉を喰らった。闇が消えた時には、もう火の玉などなかった。

「……闇が炎を包む時に感じたプリオンの活性。あれが、お前のその精霊魔法が」

「川村家初代当代・川村英雄の神霊魔法。今まで父さんたちが求め続けた秘儀だよ」

川村英雄が使えたとされる神霊魔法は、今の今まで、川村英雄以外誰一人として使えていなかった。今まで誰もその魔法を継承できず、祖母の代からずっとこの魔法を追い求めていたのだ。俺はそのことを祖母の精霊魔法に関する蔵書と精霊魔法の修行の際の父の言動から察していた。

「よくやった……」

父は健やかで穏やかな顔をしていた。今までの苦労がようやく報われたと言わんばかりの表情だった。

「父さん、喜んでもらえるのは嬉しいけど。なんで俺がこの魔法を継承できたのか全く分からないんだ」

「そうか……」

先ほどまでの穏やかな顔が曇らせてしまったことに、俺は多少罪悪感を抱いた。が、ここで止まるわけには行かない。

「だから俺、現代魔法を学びたいんだ。現代魔法の知識なら、その答え、とまではいなくてもヒントくらいは見つけられるかもしれない」

俺は、現代魔法を学ぶという口実で国立魔法大学付属第一高校への入学を考えていた。原作主人公と同じ高校に通う事で、原作介入を画策しているのである。

「……」

「父さん」

父の長い沈黙。思慮を巡らせていることは把握できる。おおよそ、俺が国立魔法大学付属高校にまで行こうとしているのを予測しているのだろう。古式魔法師と現代魔法師には溝がある。かつて魔法技能師開発第九研究所からの誘いを川村英雄が断った事実も川村家にはあり、それから現代魔法師にはほぼ不干涉を貫いてきた。その慣習を破るといふ葛藤が、父の中にあるのだろう。

「……英人の好きにしないさい。現当代である私がまるで届かなかった初代の秘儀に、手が届いたのだ。お前はもう、私を越えている」

微笑みで息子の成長を称え、ゆっくりと息を吐き、そして気を引き締める。

「この日、この時を持って。川村家当代を川村英明より、川村英人に授ける」

それは当然の事柄だった。川村家は初代が没した時より、その秘儀の継承を悲願としてきたのだから。父の当代の譲渡は当たり前前のことだった。

「川村家4代目当代。この川村英人、確かに拜命いたしました」

俺はその名を受け継ぐ。今日この日を持って、中学2年生の少年は川村家当代となった。



2093年とある冬の日

川村家当代になったからと言って何か重要な仕事が任されるといっわけではない。川村家は他家の古式魔法師に比べても多少閉鎖的で、他の家との交流が吉田家以外とはほとんどない。強いて言えて千葉家くらいだが、互いに魔法の知識を提供することはほぼない。川村家当代の仕事と言えるものは、秘儀の継承とその研鑽くらいなモノなのである。ある意味、俺はウイル子とノアレを継承する方法を探さなければいけないのだから重要な仕事かもしれない。しかし、俺自体あんまりその方法を本気で模索しようとは思っていないのだ。継承方法が明確になると、その秘儀の奪い合いになる可能性が生まれる。そんな人々のバカげた諍いにウイル子達を巻き込みたくはない。

というわけで。特に何処かに挨拶に行くこともなく、むしろ自身が現当代であることを隠しながら日常を過ごしている。

「おめでとう。で、合ってるのか?」

「さあ?」

「名のある千葉家を名乗れるようになったんだ。めでたいことだよ、たぶん」

エリカが千葉家に認められ、その姓を名乗ることを許された訳だが。幹比古が尻すばみになるくらいには複雑な事情となっていた。その原因の一つがエリカの実の母親であり、父親の愛人だったアンナ・ローゼン・鹿取の死去であるのだから、言葉を大にし

て祝えるものではない。

(愛人の子供ですものね。それはそれは鬱屈として鬱陶しい鬱憤が煮込まれているでしょうね)

喜々とした声音を止めなさい、暗黒神。

(他人の不幸は蜜の味よ、陛下)

身内の不幸は苦虫だ。



2094年とある秋の日

「英人！君は、僕を陰で嗤ってたんだな！」

俺が現川村家当代であることが幹比古とエリカにばれた。

「違うんだ幹比古。これには訳があつて」

「親友である僕にまで黙つてた理由が何だつて言うんだ！どうせ神童なんて持て囃されながら君に敵わない僕を、喚起魔法に失敗した僕を見下してたんだらう!!」

幹比古は荒れていた。喚起魔法の失敗からの不調を抱えたままスランプに陥っていた彼は自身の悪感情を抑えられるほどの余裕がなくなっていた。

「君はいつもそうだ！いつも余裕ぶつて、いつも僕を笑つてた！君はっ！」

「ミキっ！」

「……………」

思ってもいないような悪評すら口走ろうとしていた幹比古の頬を、エリカが引つ叩いた。唐突に走った頬の痛みに幹比古は呆然とし、毅然としているエリカに視線を合わせることしかできていない。

「アンタは、自分の失敗で他人に当たる奴じゃないわ」

「！」

エリカは「今の幹比古はいつもの幹比古じゃない」と述べている。それを一切疑わず信じている。対し幹比古は目から鱗、というより寝耳に水を垂らされたかのようにたたずみ、その言葉を信じられずにいた。

「僕は、僕は……………」

エリカと俺の視線に耐えきれなくなった幹比古はこの場からの逃走を図った。

「ミキ―」

「エリカ、駄目だ」

俺は、逃げようとする幹比古ではなく、追おうとするエリカを止める。

「どうして」

「今は何言っても幹比古を追い詰める」

「でも……………」

エリカの気持ちはよく分かる。親友に何も出来なくても、何かしなくてはならないという焦燥感。今はそれが余計関係を拗らせると俺は考えた。

「幹比古なら立ち直れるさ。俺たちは、信じて待つてやればいい」

「……はあ。そうね、あたしたちが信じてやらなくちゃね」

彼女自身の張りつめていたモノをため息とともに吐き出したようだ。いつものような比較的明るい表情を取り戻した。

（青春ですねー）

（青春ねー）

茶化すな茶化すな。



2095年3月上旬

エリカが良い喫茶店を見つけたという事でそこでお茶していた。幹比古はいない。

「ヒデはもうこつちに引越してるの?」

「まず一高に受かつてることを疑わないんだな」

「当たり前でしょ。あたしが受かつて、あんたが受かつてないわけがある?」

こちらの学力を疑わないでくれるのは大変ありがたいが、その分なんだか扱いが雑な気がしてならない。それ位信頼されていると解釈をしよう。そう俺はプラス思考を働

かせた。

「まあエリカの予想通り八王子にな。高尾山の近くだ。幹比古も近くに下宿してる」

引つ越し先が近いのは故意である。幸比古伯父さんから幹比古の下宿先を快く教えてもらった。

(ストーカーですか、陛下?)

(男が男のストーカー。夏に薄い本が出るやつなので、サー)

止めろ。

「ああ、ミキもちゃんと受かったんだ」

安心したような表情を浮かべるエリカ。確かに、以前の学力や魔法技能だったら疑わずに済んでいただろうが。まだ幹比古はスランプ中なのである。

「そう心配することでもなかったろう? 如何に今は調子悪いって言っても伊達に神童なんて呼ばれた幹比古じゃないって」

俺は原作知識があるので全く心配していなかった。俺というイレギュラー転生者の影響も考えたが、彼の基礎学力は以前から分かっていたので問題ないだろうと思っていた。

「あんたは心配しなすぎ。ほんと、ミキが言った通りいっつも余裕ぶってて、あたしでもたまに気に障るんだけど」

剥れているが本気で怒っているというわけではない。幼馴染との気の置けない感情

表現だ。

「慣れるよ。俺だつてエリカからのヒデ呼びを慣れたんだ」

何故彼女は幼馴染の名前を2文字に略すのか。コレガワカラナイ。後、ヒデだと父や曾祖父と被るんだが、俺以外ヒデ呼びはしていないのでヒデは俺を指す言葉であるのが確定的に明らかだ。

「さて、俺は色々やらなきや行けないからな。そろそろお暇するぞ」

引つ越し先の荷物の整理が終わっていないし、修行場の選定もしなくてはならない。精霊魔法の修行のためだけにわざわざ神奈川の実家には帰ってられない。高尾山に良い場所はないかと期待する。

「あたしはもう少しゆっくりしてくわ」

「今上がるなら奢るぞ?」

「お願いするわ」

腰を落ち着けたと思いきや、俺の言葉で即座に席を立つ。支払いはしっかりと任せられた。

「次、会うのは入学式になるかな」

「迎えに行きましようか?」

「幼馴染とはいえ、初日から同伴は色々気まずい。気持ちだけ貰っとく」

恋愛^{ラブ}と一緒に登校など、良からぬ噂が流れるやもしれない。エリカのことは友愛^{ライク}であつて
恋愛^{ラブ}ではない。

ちよつとやりたいこともあるしな。

第4話 達也の奇妙な運命（必然）

2095年4月3日

（こんな早くから登校するのはどういうお考えで？陛下）

（サー、式場も開いてないのですよー）

国立魔法大学付属第一高校入学式当日。俺はウィル子達に疑心を抱かせる程度に早く登校していた。

ノアレもウィル子も安心して貰っている。俺にいい考えが有る。だからこそこの行動だ。

（いい考えですか？）

（どこぞの司令官のように変なフラグ立ててないでしょうね？そんなフラグで大丈夫かしら）

一番いいフラグを頼む。

変なフラグかどうかは俺自身懸念している事ではある。が、それを差し引いても中庭へと歩を進めるのには重要な意味があった。

「やあ新入生。こんな早く登校してるとは殊勝な心掛けだな」

中庭のベンチで電子書籍の読書を嗜む男子学生に声をかけた。その男子学生とは、『魔法科高校の劣等生』の主人公・司波達也である。

主人公との接触。俺が考える中で最も良い彼とのファーストコンタクトはこのタイミングだ。

「妹が新入生総代になったのでその付き添いというだけです」

端末をしまい、こちらを視認する男子学生は間違いなく俺が知る司波達也だった。俺を上級生と勘違いしたのか（そう仕向けたんだが）敬語で返事を返した。

「妹？双子なのか？」

原作知識で細かい事情まで把握しているからこの質問はほぼ意味がないが、原作から乖離している可能性と無知の偽装を兼ねる問答だ。

「自分が2079年4月生まれで、妹が2080年3月生まれの年子です」

一々説明するのも面倒なのか、そう一気に説明した。

「ああ、同年度になる年子か。しかし、妹が総代ってことは一科生。それで君は、二科生か。心中お察しするよ」

彼ら兄妹が原作通りなら仲睦まじいのだろうが、普通この事情を聞いたら不仲を予想するモノだ。

（次々と口から出まかせを。随分と舌が回りますねえ、陛下）

(よくそんな真顔で嘘をつき続けられますね、サー)

これでも前世は大嘘つきでね。嘘つくのは慣れてるんだ。

「いえ、妹とは仲良くさせてもらっています。それに、妹が優秀で嬉しい限りです」

言葉に偽りのないことを証明するように嬉しいオーラが溢れている。本当にこの原作主人公は妹に関して感情の籠が外れやすい。さすが周りが後に認めることとなるシスコンだ。

「なんだそうなのか。まあ仲良きことは美しきかな、てな。俺なんて親友と喧嘩しても半年ほど絶交中だ」

幹比古とのあの諍いがあつてから全くコミュニケーションを凶れていない。半年程度の友人との絶交は予想していたことであつてもため息が出る。しかも、この状態が後3カ月ほど継続する予定だ。なおさら虚しくなる。

「それはお辛いでしょうね。心中お察しします」
「たははー」

達也からミラーコートを受けたところで、背後からこちらを窺う視線を感じた。

「新入生ですね？開場の時間ですよ」

声の方に視点を向ければ、そこに佇むのは七草真由美（さつきまゆみ）。生徒会長の原作通りの登場だった。しかし、やはり三次元（リアル）と二次元（フィクション）ではその威力が違う。エリカやウィル子達で美

少女になれてなかったら挙動不審になるところだ。

「ありがとうございませす、七草真由美生徒会長殿」

達也より先んじて俺がそう述べる。俺が新入生というワードに返答したことと相手が『七草』であることに達也は眉間を歪めた。

「あら、どこかで会いましたか？」

「いえ、九校戦の中継映像でその御尊顔を拝見させていただいただけです」

慣れているとはいえ、初対面の美少女との会話は緊張するので、自身の緊張をほぐすためそんな大仰に述べてふざける。微妙な笑顔を浮かべられたが、こんな手合いには社交界的なもので慣れているようで、何事もないように流してくれた。

「申し遅れました。俺は新入生の川村英人といいます」

「川村君、ね……」

何故か、一瞬こちらを仔細に観察した、ような気がした。「まさか川村家を知っているのでは」と思ったが、知っていたとしても高々古式魔法師一人。そこまで警戒するかは疑わしい。気のせいだろう。

「そっちの彼は？」

「……自分は司波達也です」

矛先向けられたくなかったのがありありと感じられるが、残念ならがおそらく君の方

が本命だ。

「そうですか、あなたが、あの司波君でしたか。先生方の間では、あなたの噂で持ちきりでしたよ」

「……」

達也としては予想していたニュアンスと違う事に戸惑っているようで、反応に困り沈黙を選んだのだろう。

「入学試験、七教科平均、百点満点中九十六点。特に圧巻だったのは魔法理論と魔法工学。合格者の平均点が七十点に満たないのに、両教科とも小論文を含めて文句なしの満点。前代未聞の高得点だって」

「……ペーパーテストの成績です。情報システムの中だけの話ですよ」

達也は自分の左胸を指差し、紋無し、二科生であることを指示した。

「すごいじゃないですか。少なくとも、私には真似できませんよ？ 私はこの学校で二年も学んでいますけど、同じ問題を出されても司波君のような点数はきつと、取れません」

「失礼、生徒会長。友人を式場に待たせているのでそろそろお暇します。君も一緒に行くんじゃないか」

達也がうつすら苦い顔を浮かべていたので、俺は助け船を出すことにした。

「ああ。では、失礼します」

彼はこれ幸いと搭乗する。

「……新入生だったのか」

式場に向かう途中で達也から俺に対してそんな苦情が殺到した。

「まあ、助けたんだからプلاميゼロってことで」

俺の笑みに彼はため息を返した。

（式場に着いたぞ！ですよー）

霧が出てきたなあ……。

「……これは、司波の隣とかは無理そうだな」

原作で描写されていた通り、そう指定されているかのように一科生・二科生が分かれて着席していた。この差別意識は卵ウイードが先なのかブルーム鶏ブルームが先なのか。文明・時代が進めど揉め事の種が尽きぬ人間らしいと、俺は半ば呆れた。

「大人しく前の方に座るか」

「そうしてくれ、川村」

俺は一科生で、達也は二科生。隣に座るにはあえて空気を読まない精神キキが問われる。俺にはそこまでの鉄の意思も鋼の強さもないし、達也に迷惑も掛かる。同調圧力に同化し、真ん中より前に座ることにする。

「じゃあな、司波。俺が君の妹とか、君が俺の友人と同じクラスになったらまた会おう」

「ああ、そんな奇妙な縁だったらな」

奇妙な縁と彼は言うが、彼が俺の友人と同じクラスになるのはほぼ確定している。いや、エリカや幹比古と俺が幼馴染になっているという点では奇妙な縁と呼べるか。

一でも今は、そんな事はどうでもいいんだ。重要な事じゃない《閑話休題》。

式開始までもう然程時間がない。ほとんどの席が埋まる中、空いている席を見つけると同時に、見えぬ運命を垣間見た気がした。

「すまないが隣の席、よろしいか？」

「……………」

俺の顔を一瞥してから席を差し出す少女・北山雫きたやましずく。差し出された席の反対には案の

定、光井みついほのかが座っていた。

「ありがとう」

礼を述べてから着席する。光井がこちらを覗き見たが、すぐに興味を無くす。彼女らとは今のところ会話のネタがないし、時間もない。今はまだ、私が動く時ではない。



式は原作通り、特筆することもなく進行。無事終了となった。生徒が退場し始め、北山や光井も俺に声をかけることなく去っていく。

(声かけて貰えるとか淡い期待してたのかしら)

舐めるな、俺は童貞だ。一生涯守り抜いた経験を持つ猛者だ。女性にそんな淡い期待など持ちほししない。

（陛下……）

（サー……）

おつと心はガラスだぞ？

学校のIDカードを貰い、俺がAクラスであることを確認する。考えていなかったことではないが、司波深雪メイシロインと同じクラスになるのは作為的なモノを感じてしまう。

（どうやら神様はあなたも弄びたいみたいね）

なあに、あちらが弄ぶというなら、こちらは遊ぶのみだ。お前たちが着いている以上、どんな苦難も楽しめるだろうさ。

（にほほほほ）

（ふふふふふふ）

俺には未来視の魔眼もカミに愛される性質も持ち合わせていないが故にヒデオのような英雄ヒーローにはなれないが、原作知識と転生特典であるウィル子達の協力マストラフを最大限駆使してたち回る益良雄マスラフになろう。

「ヒーデー！」

聞き覚えのある大声に視線を向ければ、エリカが校門の前でこちらに大きく手を振つ

て呼びかけていた。彼女の周りには、こちらが勝手に知っている数人が集まっている。

「あんまり大声で呼ぶなよ、目立つだろう？と、どうやら奇妙な縁があったみたいだな。司波」

「ああ、そうだな。川村」

不敵な笑みを向ければ、苦笑いが返ってくる。ここまで早い再会は彼も予測してなかったようだ。

「さて、初見の方々もいるようだしざっと自己紹介しよう。俺は千葉エリカと5年前からの友人であり、司波達也とは入学式前に少し会話した知人である川村英人だ」

一々エリカや達也との関係を質問されても面倒なので一気に説明する。達也も手間が省けたというように微笑し、エリカは何が嬉しいのかニコニコしている。

「すでにござんじかと思いますが。お兄様の妹・司波深雪です。司波ではお兄様と区別ができませんから、『深雪』とお呼びください」

「私は、エリカちゃんと入学式前に会って友達になった柴田美月です。私も『美月』で構いません」

「お心遣いありがとう。有り難く『深雪さん』に『美月さん』と呼ばせてもらおうよ。そして司波は『達也』と呼び捨てにさせてもらおう。そちらは『ヒデ』以外だったら公序良俗に反さない限り好きに呼んでくれ」

俺の心情的に、まだ親しくない女性を呼び捨てというのは気恥ずかしい。彼女らはそれを察してか笑顔を持って承諾し、達也は「仕方ない」と言わんばかりに頷いた。

「で、なんで俺を大声で呼びつけたんだ？ エリカ」

「この前のケーキ屋行こうと思って。一緒に来るでしょ？」

「断る選択肢が考慮されてない気がするんだが」

「来ない？」というお誘いではなく、「来るでしょ？」というほぼ断定である。

「だってヒデ、甘いモノ食べに行くって言ったら着いてくるじゃない」

「色々と訂正したいことはあるが、まあいい。これ以上の立ち話もなんだし、あとはゆっくり喫茶店で話そう」

全員がそれぞれに肯定の意を示し、エリカを先頭に歩き出した。



「エリカと英人さんは恋人同士なのかしら？」

「違うが？」

「違うけど？」

喫茶店での会話はそんな感じのガールズトーク。達也はほぼ聞き専だったが、俺はエリカとの親密さから時折話題に上げられた。

他愛もない平和な時間が過ぎていった。

第5話 隣の司波は青い

2095年4月4日

俺は朝早く九重寺に訪問しようと、その寺の石段を上っていた。九重寺に訪れる理由は、古式魔法師川村家・現当代である俺の目的と川村家の代表として家のスタンスを九重八雲に伝えて広めてもらおうという思惑故である。何故そんなことをしようとするかというと、最近俺の実家やアパートの周りでなにやら嗅ぎまわっている者が多数確認出来ているためである。古式魔法師の間で古式魔法の秘事がどうだの川村家の動きが怪しいので騒ぎになっているのではないかと思っただ次第だ。

(サー?)

なんだウィル子。俺は今石段のぼりで忙しい。

石段がとても長い。5分近く歩きつばなしだが、寺の入り口が一向に見えてこない。(なんでずつと石段を上り下りしているのですか?)

は?

(……どうやら、幻術かしら。寺の住職が忍者っていうのは間違いじゃないみたいね)

(アイエエエエエ！ニンジャ、ニンジャナンデ！)

まさか、あの和尚にも警戒されてるとは……。

『川村』という名前が、古式魔法師の間ではここまでビツクネームと思いついていなかった俺にはとんだビツクサプライズである。

俺じゃ初見の幻術なんて対処できないな。ノアレ、消してもらえるか？

(お安い御用よ、陛下)

俺は制服の上着の下に隠している特化型CADの引き金を引く。そうすると精霊魔法に偽装した起動式と魔法式を展開し、それを受けてノアレは幻術に用いられている魔法的エネルギーを消して、魔法を無効化した。空間が縮むような錯覚を起こし、目の前まではるか遠くにあつた門が近付いてきた。目の前に門がある今の状況こそが現実だったようだ。

特化型CADに収められている精霊魔法に偽装した起動式と魔法式。これは、他人に俺が精霊魔法を使つたと思わせるためのフェイクであり、実際はウィル子とノアレにサイオンを提供するだけのものである。ウィル子とノアレはこの世界のルールに準拠しているためプシオンを核に持ち、その核を守るためにサイオンで覆つて存在を保つ神霊である。サイオンは彼女らにとって基礎代謝のエネルギーでもあり、徐々に消費されている。ペースとしては1時間に全体の約0.5%。そして、俺は彼女たちに彼女たち換算で1時間に約0.7%、常時サイオンを供給している。基礎代謝のエネルギーと言つ

た通り、彼女たちに仕事をしてもらえばその分サイオンは消費される。偽装魔法は仕事の分のサイオンを一まとめに支払う役割も持っている。さらに設定を語るとすると、ノアレの消去能力は物質・物理エネルギーに対して闇で触れる必要があるが、魔法的エネルギーに対しては闇で触れる必要はない。消去された側はどうやって魔法を無効化されたのがほとんど分からない仕様だ。

「それが川村家の秘儀かい？」

門を挟んだ向こうには、顔に傷がある坊主がこちらを窺っていた。

「その一部ですよ、九重住職」

笑顔の奥の目が一切笑っていない。未だ九重八雲は警戒を解かない。

「突然の訪問、大変失礼しました。申し訳ないのですが、今日は川村家現当代として、行動の目的と川村家のスタンスをお伝えに伺いました」

俺は頭を下げ、その姿勢のまままで此方の意志を伝えた。

「なぜそれを寺のしがない住職に伝えに来たのかな？」

「忍びである九重八雲様にその意思を広めてもらい、他家との無駄な衝突を避けるためです」

「まだ頭は上げない。あちらの警戒が解けるまで、こちらは無防備でなくてはならない。」

「そうか、そうかそうか！ああ、良かったよ。若き川村家の当代が急に訪ねて来て僕もびつくりしたんだ。『神霊の隣人』との戦闘なんて、命がいくつあっても足りないよ」

お茶らけた雰囲気が変わる。警戒は、完全にはいかないが、解いてくれたようだ。

「重ね重ね失礼いたしました。それと、その二つ名は曾祖父だけのものです。俺なんぞは遠く及ばぬ若輩者ですから」

ウィル子・ノアレ・マツクル・エリーゼと契約していた化物なんぞと並べられたくはない。こちらのウィル子とノアレは弱体化しているのだ。

「そうかそうか。とりあえず、詳しい話は縁側でも聞こうか」

九重八雲は俺を寺内に招きいれた。



「なるほど。もう現状じゃ手詰まりだから、現代魔法に取っ掛かりを探しているわけか」

俺が魔法科高校に通う理由、その体裁と川村家の現状を大まかに伝えた。俺個人の本当の理由はひた隠す。原作介入なんて言っただけの意味が通じるわけがない。

「何にせよ、争いや厄介事を起こすつもりがないことを君の口から聞いて良かったよ。君の家の動向を探ってほしいと、依頼がたくさん来ていたんだが。下手に突いて身を亡ぼすのは避けたいから、どうしたものかと思っていたところなんだよね」

「お騒がせして、本当に申し訳ありません」

五体投地も辞さない土下座姿勢だ。俺個人の行動が、そこまで他家を刺激しているとは全くといって考えていなかった。もう少し早めにこうしていれば良かったと自身の浅慮を嘆いた。

「僕としてはこれでぼちぼち稼げて大助かりさ」

食つていくために働く喰えない坊さんである。

「さて、君から色々と情報を貰えたし。お代として面白いモノを見せてあげよう」

九重八雲が立ち上がり、門の方へ歩いていく。いつの間にか、寺の修行僧と思しき者達が門の柱に隠れていた。見知った少年と少女が顔を出し、少年が門を通ったその瞬間に修行僧が一斉に襲い掛かる。次々と襲い来る修行僧を、体術だけで撃退していく少年。その後ろにのんびりと住職は歩いていく。少年少女が気づく気配はない。

(奇門遁甲の類かしらね。陛下は観客つてことで対象外みたいだけど)

そうノアレが解析してくれた時。住職が少年を投げつけ、抑え込んだ。

「……師匠には、まだ敵いませんね」

「体術だけなら分からないが、僕には師としての立場があつてね」

住職はそれで満足したのか、少年を解放した。

「どうだい？ なかなか面白いモノだったろう」

「――」

住職は少年少女ではなく、俺に声をかけた。少年少女はそれでようやく近くまで歩み寄っていた俺に気付いた。住職の術で俺も隠されていたのだろう。

「面白い以前に驚きましたよ。あの修業方法といい、知人の存在といい。と、おはよう。達也に深雪さん」

「ああ、おはよう。英人」

「おはようございませす。英人さん」

達也と深雪の表情は、声音のわりに何処か固い。何故俺がここにいるのか聞きたいの
だろう。

「君たちが古式魔法師の関係者だったとは驚きだ。古式魔法師として挨拶回りしてたら、とんだサプライズだな」

彼らが聞き辛そうだったので、聞きたそうにしていたことを言葉に混ぜておく。彼らに俺がただの古式魔法師と認識してもらうためだ。どこまで意味があるかは分からないが。

「いや、彼らは古式魔法師ではないよ。僕個人の、体術の弟子さ」

「才能にほれ込んで、というやつですか。と、そろそろ俺はお暇しますよ。じゃあ、達也に深雪さん。また学校で」

「ああ」

「ええ」

「ここでの目的は終えたし、彼らの疑いの眼差しはきつい。俺自身から事細かく話すより、住職から聞く方が信用できるだろう。」



「師匠、彼は、川村英人は何者なのですか？」

高校入学に關しての話題は大体話終えた後、司波達也は彼について尋ねた。九重八雲に挨拶に来るような男。何かあると達也の本能が訴えていた。

「川村英人、精霊魔法を専門とする古式魔法師の家系・川村家の4代目当代。一家門の若き現当主さ」

「川村家……。それはどういった家系なのでしょう？」

川村家という名前に、達也は聞き覚えがなかった。

「川村家の歴史はとても浅い。古式魔法師として認められたのは80年ほど前、初代当主・川村英雄が精霊魔法を使っているのを確認されてからだ」

「80年前、ですか？」

達也は訝しむ。古式魔法とは古くから歴史の影にあつた物であり、陰陽道か何かしらの宗教が絡んでいるモノだ。そんな浅い歴史はありえない。

「川村家は、どこの宗派にも依存せず、陰陽師の血も流れていない。突然現れた家系なん

だ。そんな突然現れた家系であるにも関わらず、初代当主はその強力な力を示していたらしいよ」

「強力な力？」

宗派に依存しない・陰陽師の傍系でもない。謎が多すぎて詮索しきれないが、そこを聞いても話は進まないと考えた。

「噂でね、精霊の上位の存在・神霊を従えていたそうだ。神霊に関しては細かいところは秘事にふれることだから、色んな所がうるさくて話せないけど、自然現象そのものと理解してくれると助かる」

「自然現象そのものを従えていた家系が川村家である？。では、何故『川村家』は無名なのでしょうか」

古式魔法師の家系で在ろうと強い力を持つ家系が影に隠れ続けられるほど、現代社会は甘くない。どこかで情報が漏れるはずなのだ。

「それは、その初代の秘儀を後の当主達は受け継げなかったらしい。川村家の隆盛は、初代一代にして衰えたわけだ。まあそれでも、古式魔法師の間では秘儀を隠しているんじゃないかって怖がられていたけどね」

「……そうですか」

すでにかつての栄光であると確認でき、危険視は杞憂であると改めようと考えた時。

九重八雲から次の句が述べられた

「そして、最近流れだした噂なんだけど。現当主がその秘儀の継承に成功したらしい」
「彼は、神霊を従えている。ということですか？」

「噂は噂さ。これ以上の詮索は僕も怖いんだ。虎の尾ならまだいいけど、竜の逆鱗だったらと思うとね」

「……」

『今果心』の異名を持つ九重八雲をして、ここまで恐れさせる川村英人。達也は彼の底を凶れず、警戒を余儀なくされた。

「まあその竜も温厚で温和な性格の様だね。自ら騒ぎを起こすつもりも、騒ぎを煽るつもりもないってさ」

坊主頭を撫でる九重八雲の顔に、うつすらと汗が浮いているように達也には見えた。



「おはよう」

俺はAクラスの教室に早めに来て席に着いていると、こちらに挨拶をする声が出た。

「ん？ああ。おはよう」

声の方に視線を向けると、北山雫が声の主であることが分かった。

「式で隣だった人だよ。同じクラスなのは奇遇」

「ははは、高々隣に座っただけなのに覚えてくれたのか。クラスも同じで席も前後とは、確かに奇遇だな」

一瞥しただけだと思っただが結構観察していたのか、それともただ人の顔を覚えるのが得意なだけか。九重寺の事もあって、前者ではないかと邪推する。

「パーティーとかに親の連れで良く出席するから、人の顔は覚えないと失礼になる」

後者だったようで内心ほっとする。

「パーティー？もしかして君は数字持ちナンバースだったり？」

北山雫だと知っているのはあくまで原作知識。無知アピールを忘れないのが嘘つきの秘訣。

「違う。私の家がお金持ちなだけ」

「金持ち？失礼ながら、名前を伺っても？」

できるだけ早めに名前は聞いておきたい。でなければ、不意に名前を呼んでボロを出してしまう可能性がある。備えよう。

「北山雫」

「北山ってことはあの北山か。なるほど合点が行った。おっと失礼、申し遅れた。俺は川村英人だ、よろしく」

「よろしく」

「雫？その人はお知り合い？」

北山の後ろからこちらに歩み寄る光井ほのか。この二人は勝手にセツトだと思っていたが、今日は何かあつてセツトではなかったのか。いや、席が離れているから少し離れていただけか。

「ほのかも会つてる。入学式で私の隣だった人」

「あ、ああ。あの時の」

「そうそう、あの時は隣で、今度は前後で奇遇だねつて話を北山さんとしていたんだ」

彼女もすぐには思い出せなかったが、記憶はしていたようだ。さすがに入試成績2位と3位。元の頭脳のスベックから高そうだ。

「俺は川村英人つて言うんだ。『ヒデ』以外だったら公序良俗に反さない限り好きに呼んでくれ」

ヒデ呼びをエリカ以外に許す気はない。元々はエリカからも許す気がなかったのだが、何度否定しても止めてくれなかったのでこちらが諦めることとなった。

「私は光井ほのかつて言います。『ほのか』つて呼んでください」

「私の方も『雫』でいい。けど、なんで『ヒデ』？」

「友人が俺をそう呼ぶんだが、なんとなくその響きが嫌いだな。出来れば本当に『ヒデ』だけは止めてくれ、雫さんにほのかさん」

どうしてヒデ呼びが嫌いかというと、あまり深くは言いたくないが良くないものを連想してしまうのだ。二人は頭に疑問符を浮かべるように首を傾げているので、俺が嫌がる理由を知らないようでも助かる。

(ほんとひで！)

(ひでしね)

止めないか！

唐突に教室のアトモスフィアが変わる。変わった原因は教室に入ってきた司波深雪だ。彼女が入ってきた瞬間、教室内の生徒がほぼ全員彼女を見つめて見とれている。俺は美しい花には棘があることを知っているため「ふつくしい……」以前に「ジツサイコワイ！」と思ってしまう。

「おはようございます、英人さん。そちらのお二人は初めてですね。ご存じでしょうが、司波深雪といえます」

同学年の同性に対してもきつちりと礼をして礼を失せぬそんな挙動がとても映える。

その後はほのかが躓くというイベントが起きつつ彼女らは仲良く会話していた。俺は、流石に女子三人の会話に混ざる勇氣はないし、深雪と話していると周りからの（特に男子からの）視線が痛かったので空気となった。



時間は昼休みを迎える。

「雫、ほのか。良ければ食堂で昼食を一緒に取らない？英人さんも」

深雪はそんな提案をする。俺もその対象になっているのは少し謎だが、彼女としては社交辞令のようなものだろう。

「ごめん、深雪。私たちはお弁当だから。混む食堂ではちよつと気まずい」

ほのかもその言葉に同調してすまなそうにしていた。彼女らが誘いを断るとは思っていないが、そういえば原作でもこの時彼女ら二人は昼食を一緒に取っていないかったなと思いついた。『劣等生』でも『優等生』でも描写されていないが、そこまで重大なイベントではなかったようだ。

「ああ、すまないが俺もなんだ」

コンビニの名前が描かれているビニール袋を掲げ、昼食が購入済みであることを示す。食堂での森崎駿もりさきしゅんが達也たちに喧嘩を吹っ掛けるイベントはスルーしたい。そもそも人も人混みは苦手なのだ。

「そう。明日から私もお弁当にしようかしら。じゃあ、また後でね」

彼女は教室を出ていった。俺もその姿を見送ってから教室から出る。雫から一緒にどうかと誘われたが断った。

モノを食べる時はね、誰にも邪魔されず自由に、なんとか救われてなきやあダメ

なんだ。独りで、静かで、豊かで……。

(あら、ぼっち飯ですか？それとも便所飯でしょうか？陛下)

それ以上いけない。

食堂から戻ってきた深雪が多少不機嫌であったこと以外特筆することはなく、時間は過ぎていく。



放課後となった。それでありのまま起こっていることを話すとすると。校門で森崎率いる一科生グループと達也率いる二科生グループ with 深雪が言い争いを始めようとしていた。俺は木々の影に隠れて遠目から観察している。

しかし、リアルで見ると本当に呆れた連中だな。あれだけ達也に突つかかれば深雪さんにマイナス印象を与えるって気が付かなかなあ。

(サー、主人公が巻き込まれているようですがどうするのですか?)

(随分と腹を立ててる人が居るわね。CADまで持ち出すんじゃないかしら)

原作通りなら一科生達がCADを構えるが、問題無く対処されるはずである。だが……。

俺が存在することによる影響が怖いな。いちおう封じとくか。ウィル子、ほのかさん以外の一科生のCADを妨害しといてくれ。

(にほほほほ)

間違つてもソフトウェアを食べるなよ？

(CAD内部の電気信号を食べてしまえばいいだけです。簡単な仕事なのですよー)

じゃあ、そんな感じで。

俺は懐の特化型CADを取り出すことなく引き金を引く。ウィル子達にサイオンを与えるだけなのだから照準なんて合わせる必要はない。あくまで起動式・魔法式が複雑になってしまったため特化型CADでないと展開が俺の汎用型CADに収める他の精霊魔法と比べても遅いのだ。

「そこで何をしてるのですか？」

唐突な背後からの猜疑の声。体がビクつくのを理性で抑える。ここで少しでも怪しまれる行動は控えなくてはならない。俺は何気なくゆっくりと振り返る。

「校門で何やら言い争いをしているようでしてね。あんな真ん中で騒がれていると横も素通りしづらい。それに、二科生グループの方と知り合いでして、介入すべきか静観すべきか。あちらから見えな場所所思案していたのですよ、七草生徒会長」

「あら、そうでしたか。勝手に怪しんでしまつてごめんなさい」

笑顔の内にまだ懐疑の眼差しを秘める七草真由美。マルチスコープで此方を見られていた可能性があるが、少なくともこの場で詮索するつもりはないようだ。

「風紀委員長が既に渦中へ向かわれているようですが、生徒会長は行かないのですか？」
「摩利まりつたら。私も行かなくてははいけませんね。では、くれぐれも正当防衛以外での魔法使用は控えてくださいね？」

見られていたことが確定的に明らかだ。あと神に願うとしたら、魔法式を見られていないことだろう。

「言われるまでもなく」

俺の返事に満足したのか、懷疑の眼差しを解いた笑顔の後、風紀委員長がいる方へと歩いて行った。

で、見られてたんでしょか？電子のカミ、闇のカミ。

（知らん。そんなことは俺の管轄外だ。なのですよー）

（マルチスコープを使っているのは分かったけど、どこを見ていて、どこまで見えるのかは私でも分からないわ）

もう駄目かも分からんね……。

この事柄に關してはもう対処のしようもないので、俺は考えるのを止めた。
悩み現実逃避がなくなつた俺は既に騒ぎが収まった校門を清々しい気持ちで通り抜けようとする。

「ヒーデー！」

「……エリカ、君は俺を大声で呼びつけないと気が済まないのか？」

相も変らぬ大きな呼び声は少くない生徒の視線を集めるのだ。大変やめてほしい。

「アンタが悪い」

「さいですか」

どうしようもない。諦めよう。そうして俺は達也一行の駅までの行脚にまき込まれた。



「そういえば、ヒデもホウキは自分で調整してるんだっけ？」

話がCADの調整の段になった時、エリカが俺に話を振った。

「ああ、CADに入れてるのが全部川村家独自の精霊魔法だからな。業者になんて頼めないから、俺の家は全員自身で調整してるんだ」

俺は右腕の袖を少し捲り、汎用型CADを見せる。このCADには川村英雄の秘儀以外の精霊魔法が多数入っている。川村家^母が川村英雄^父の秘儀を独自に解析して得た知識に、四十九院家^父と吉田家^母の一部知識を混ぜ、さらに前当主^父が研鑽した魔法だ。既存の精霊魔法からは多少ずれているため調整できる業者など存在しない。居たら居たで情報漏洩で困る。

「英人さんの家って古式魔法の家なの？」

「ああ。と言つてもぼつと出の陰陽師みたいな人から興つた家だな。祖母の代でほぼ廃れて、今では少ない秘儀を継いでるだけなんだ」

ぼつと出の陰陽師みたいな人

川村英雄から興つて、その娘で秘儀祖の継承母に失敗れしている。何も間違つていない。

(陛下、(嘘つくのが)お上手ですね)

コンナハズジャナイノニー。

(いやー、本当にサーは(虚言の混ぜ方が)すごいですね)

それほどでもない。

それ以上の詮索はされず、話題は他愛のない物になっていった。

第6話 間の悪い間違い

2095年4月5日

俺は登校時間を少しずらすことによって、達也たちが生徒会長に絡まれるイベントをスルーする。巻き込まれるのは御免だ。しばらく生徒会長とは会いたくないし、ついでに言うなら三巨頭とできる限り接触したくない。特に次期当主である十文字克人じゅうもんじかつととはできる限り会いたくない。十師族の当主に睨まれるなんて誰も得しない。

今日の一日は何事もなく平和に終わる。

(そうは問屋が卸さないってね、陛下?)

「英人さん、少しよろしいですか?」

昼休み。生徒会室から戻ってきたであろう深雪から声をかけられた。

「深雪さん? どうかしたかい?」

「七草先輩から放課後、生徒会室に来てほしいと言伝を預かりました」

予想外だった。まさかご指名されるなんて露とも思ってた。なかつた。

「私も放課後に生徒会室へ行くので一緒に行きましょう」

「ちなみに拒否権とかは?」

「引つ張つてでも連れて来いと言われましたので。何かしたのですか？」
 「俺が訊きたいよ……」

生徒会長からは逃げられない。生徒会室直行が余儀なくされた。



放課後。生徒会室、ではなく第三演習室に来ていた。理由は知つての通り、生徒会長と風紀委員長で達也の風紀委員加入を画策したが生徒会副会長が異議を申し立て、決闘の元に達也の実力を証明することとなったからだ。それ故に演習室の真ん中ではつとりきようぶしようじょうはんぞう服部刑部少丞範蔵副会長と達也が睨みあつていた。原作通りの流れでここまで至つたが、俺が絡まれて会話を挟んだりしたという違いがある。だが、特筆すべき差異はそこではない。何故か十文字克人もいるという事だ。ここに来て本当にバタフライエフエクトが起こつてしまったのかもしれない。

「川村だったか。どちらが勝つと思う」

俺の隣で今まで黙して語らなかつた彼がそう静かに問いを投げた。

「俺はどちらの実力も知りませんから、勝敗を予想することはできません」

「そうか」

彼はそうして再び黙する。彼も達也については実力を知らない。俺から達也について何か聞き出せないかと期待したのかもしれない。俺は原作知識でしか彼らの実力を

知らない。この世界の俺が彼らの実力を知っているはずがないのだ。予想も達也の実力も述べられるはずもない。

「ですが、あえて言うなら」

「？」

「面白いモノが見れるかもしれませんが」

この言葉は、九重寺で達也の体術を見た俺なら言える言葉だろう。

試合開始の合図が鳴る。達也は即座に動き、三か所で三度CADの引き金を引く。軍配は達也に上がった。

完全原作通りだな。

(ニンジャIIタイジツ、ジツサイスゴイ。のですよー！)

(あの先輩今どんな気持ちなのかしら？愛しの会長の前で無様晒してどんな気持ちなのかしら？)

止める暗黒神。



「それで、俺は何故呼ばれたのでしょうか？」

生徒会室。異議がなくなり、達也の風紀委員入りが決定した後、今まで放置されていた、俺が生徒会室に連行された理由を尋ねた。三巨頭はそろったままである。

「お前には生徒会・風紀委員・部活連のどれかに所属して貰う
「はい?」

十文字克人がそう口火を切るが、全く意味が分からなかった。

「川村英人君には生徒自治組合3つの内、どれか選んで所属して貰います」

異音同義語で再度繰り返し返されても困る。何も理由が説明されていない。

「えーと、生徒会には既に深雪さんが入りましたよね?」

「人手が多いにこしたことは有りません。多すぎるのも問題ですが」

「部活連はもう十分人手が足りていると思うのですが?」

「人手が十分という事はない。今の人数でも時期次第では猫の手も借りたいくらいだ」

「風紀委員はもう推薦枠が埋まっているはずでしょう?」

「生徒会長・風紀委員長・部活連会頭の三者の推薦と職員室の同意があれば入れる一般枠

というのがある」

「……」

拒否権も逃走経路もないことは分かったが、彼らがどうしてそこまでするのか一切見えてこない。何が彼らをそこまでさせるのか、自身の知識から探り出してみるが。1
件、もしかしたらという事項が浮かんだ。

「……『川村』である俺を、監視するためですか?」

俺の懷疑を受けて三巨頭はそれぞれ視線を交わす。最後に生徒会長に視線が集まり、仕方ないと彼女はため息を吐いた。

「今まで現代魔法師に不干渉を貫いてきた『川村』であるというのも、貴方を私たちの目が届くところに置いておきたい理由の一つです」

生徒会長はこちらをまつすぐに見つめる。そこにおふぎけは一切ない。俺は真剣な視線を返し、続きを促す。

「主な理由は、貴方が昨日校門での騒ぎがあつた際に使つた魔法です。あの後に一科生の方々が、魔法が発動できなかったことを訴えました。すぐに治つたようですが。私は、貴方の魔法によるものだと思つています」

三巨頭全員がこちらを睨む。他は詳細を聞かされていなかったのか驚いた顔をしていた。

「二年生とはいえ、一科生から魔法技能を奪つた。あの魔法は何ですか？」

虚偽は許さないという三者からの圧力。他家の魔法師から他家の魔法の詳細を聞くというマナー違反。それでもなお、彼らは俺に問わねばならないのだ。三人は生徒を守るため、うち二人はさらに日本の現代魔法師を守るため。

「……あの魔法は魔法師から魔法技能を奪うものではありません」

俺は圧力に負けたわけではなく、彼らの思いに応えるため詳細にはいれないが答え

ることにした。

「CADに対し、起動式の構築を阻害する、精霊魔法に分類されるものです」

「魔法師の魔法式ではなく、ですか？」

「はい、あくまでCADに対してのみです。CADを介さない魔法の発動は阻害できません」

それを聞いて生徒会長と風紀委員長はほっと胸をなでおろした。

「なぜ件の際に使用した？」

会頭はまだ圧力を緩めていない。

「友人らに身の危険が及ぶ可能性があったからです。千葉エリカといえど、複数人のCADを一瞬では叩き落せません。友人の身を守るために必要でした」

悪意のあった物ではないと分かり、俺の答えに会頭が気を緩めた。

「千葉と友人なのか？」

「風紀委員長は千葉道場の門下生ですよね？エリカから聞いてませんか？」

「いや、千葉とはそんなに話が出来てなくて……」

そんな議題のそれた風紀委員長の質問で全体の空気も和んだ。

「誤解は解けたようですね。では、俺が所属する件が無効ということでは」

『川村』であることも理由の一つですから、そちらも説明してもらえますか？」

和んだ空気がまた引き締められる。先ほどとまではいかないが。

『川村家』は現代魔法師界限を害するつもりはありません。俺が一高に入学したのはあくまで更なる研鑽の為の、現代魔法の知識が目的です。これも数字持ちから秘技を奪い取るつもりはなく、現代魔法師一般の知識を欲しているだけです」

『川村家』という古式魔法師の家系は、現代魔法師の一般常識が知りたいだけなのだ。害そうとする悪意も、秘密を暴き立てようとする好奇心もない。

「これで充分でしょうか？」

「ええ」

「では」

「言葉では何とでも言えるでしょうから、やはりどれかに所属してください」

「……」

彼女は今までと打って変わっていい笑顔をしている。言葉の通り、まだ懸念は残っているというのものもあるかもしれないがそれ以上に、「この子は弄り甲斐がありそう」というふうに見える。

「……」

三者を見やる。生徒会長はやはりいい笑顔、風紀委員長は不敵な笑み、会頭は目を伏せている。

「……生徒会で」

肉体労働は嫌である。

「待て！ さっき言つてた魔法なら風紀委員が適任だろう！」

「彼に選択権を渡そうつて言い始めたのは摩利でしょ？」

「だが！」

何か目の前でコントを始めた。さっきまでの重いふいんき（何故か変換できない）はどいへやう。

「まあ、そのなんだ……。よろしく頼む、深雪さん。それと、頑張れ達也」

「はい、よろしくお願ひします」

「ああ、そつちも頑張れ」



2095年4月6日

放課後の生徒会室。達也含む風紀委員らと中条あずさなかじょうが新入部員勧誘週間の巡回に駆り出されている時間、俺は会計の役職を得ているが、既に粗方仕事を終えていた。他の面々も同様でのんびりお茶をすすっていた。

「それにしても摩利つたら、最後まで英人君を貸し出せつてうるさかつたわね」

会長とはエリカとの関係あつで散々弄もてられて砕けた言葉で語り掛けられるくらいの仲に

なっていた。他の生徒会の方々とも少なくとも険悪な空気はない。

「CADを封じる魔法は珍しいですからね。争いを収めるには一見適しているように思えます」

会計の先輩・市原鈴音いちばらすずねは淡々と見解を述べた。

「何度も説明している通り、あの魔法は精霊魔法という性質上、効果の反映が遅いんですよ。発動済みの魔法は封じられませんし、俺は現代魔法全般が苦手でCADに入つてないからまともに応戦もできません」

辟易する。何度も「ウィル子の対応は遅い」なんて嘘をつかなければいけない現状は大変ストレスになる。ウィル子達は俺の魔法の展開など待たずとも即実行・即終了させる力を持つというのに、俺はそれを過小表現しなければいけないのだ。

「現代魔法が苦手なんて、入試成績23位が言う言葉じゃないわね。英人君？」

会長は本当に男性を弄る時はいい笑顔をする。

「個人情報個人情の漏洩はいただけませんよ、会長。それに、生徒会の先輩方は試験成績一桁の常連で、深雪さんは主席入学です。ここで苦手と言うのは差し支えないでしょう」

改めてその事実を鑑みると、何故俺が生徒会役員なのかと疑問に思う。約200人中23位と上位のはずなのに自信も湧かなければ誇りも感じない。

「さらに付け加えるなら。俺が現代魔法を使った場合、静かで加害者もいない試験なら

まだしも、実践なんて人が暴れてる場所では良くて不発、悪くて暴発ですよ」

それが俺の現代魔法技能の事実である。集中させさせてもらえればそれこそ上位の成績を出せるが、実践となればそこで使えるレベルのものなんて魔法式の構築もままならない。信頼できない現代魔法を使うくらいなら、初速が遅かろうと迷わず使い慣れた精霊魔法を使う。

「本当に精霊魔法一辺倒なんですな」

深雪からは少なくとも呆れが見て取れる。

「古式魔法師は一つの魔法を極めてこそ、という価値観が主流だからな」

俺がその肩をすくめて答えた。その時、生徒会室の内線がコールされる。

「七草、至急部活連本部に来てくれ。問題が起こった」

「分かりました」

ヴィジフォン越しに会頭と会長が真面目な面持ちで応答する。どうやら原作通り、達也が巻き込まれたようだ。



「俺はキャスト・ジャミング擬きより、英人のCAD封じの方が凄いと思うが?」

部活動勧誘も例の剣道部と剣術部の諍いの事後報告も終わった後、適当なカフェテリアにて達也達と談笑していた際、キャスト・ジャミング擬きにはそれ以上触れられたく

ないのか、達也が話題の矛先を俺に向けた。

「「CAD封じ？」」

エリカ・美月・レオは聞きなれない言葉に首を傾げる。

「エリカは知らないのか？」

「知ってるわけないだろう？あれは三巨頭に睨まれたから仕方なく答えたが、川村家の秘儀の一部なんだ。本当だったら門外不出、他言無用の代物なんだよ」

達也はエリカと俺が長い付き合いであることを知っているから、エリカが知っているモノだと勘違いしたのか。もしくは、家同士の繋がりを探るための質問だったのか。とりあえず、エリカとは長い付き合いとはいえ、家同士の付き合いではない。あくまで個人の付き合いに、家の秘儀など晒せない。

「川村家の秘儀、か……」

「それってどんな魔法なんだ？」

達也の小さな眩きは、レオの好奇心によってかき消された。

「アンタねえ……」

「な、なんだよ」

レオはマナー違反をしていることに気づいていないが、エリカはそれを暗に諫めている。

「レオ、これ以上CAD封じについて聞きたいと言うのなら。最悪お前を……」

低い声で多少脅す。これ以上は本当に――

（「お前も家族だ」ですか？）

（「お前は知り過ぎた」じゃない？）

違う、そうじゃない。

「とまあ、冗談だが。本当にこれ以上の詮索は止めてくれよ？ 達也もな？」

「あ、ああ。冗談か。ちよつとブルつちまつたぜ……」

「ああ、分かった」



2095年4月23日

この日に至るまで色んなことがあった。達也がエガリテという同盟に嫌がらせされたり、達也が壬生紗耶香という剣道部の先輩に逆ナンされたり、達也が逆ナンに関して生徒会室で弄られたり、ブランシュっていう反魔法国際政治団体の話聞いたり、達也がまた壬生に逆ナンされたり、学内の差別撤廃を目指す有志同盟が放送室を占拠したり、それで差別撤廃に関する公開討論会が予定されたりした。

ほぼ達也に関することだが彼は原作主人公なのだから当たり前だ。俺は新入部員勧誘週間時には昼休みも放課後も生徒会室に立てこもり、生徒会長に「友達が少ないのか」

等心配もとい弄られ、放送室占拠の際はすぐに向かったがほぼ傍観を決め込んだ。原作知識を持つ俺が今日この日ブランシユ事件と呼ばれるそれが起こることを知っていないのかという、下手に潰して根を残すより原作通りに一網打尽にした方がいいと考えたからだ。純粹に差別に関して論じたい者・ブランシユに洗脳されている者の区別もつかない中、全て自ら叩くわけにもいかない。

それで、現在は放課後。公開討論会が開かれようとするさなか、風紀委員と生徒会長除く生徒会はその警備にあたっていた。俺も生徒会役員なので（とても不本意だが仕方なく）その警備の一員となっている。

「なあ、達也。放送室を占拠した面々、いや、壬生先輩だけでもいい。この討論会に来てるのを見たか？」

警備の一人としてこの疑問は当然出せるだろう。この後の行動を怪しまれぬようにするために布石となる。

「……いや、見ていない」

少し目を瞑って黙考してから答える達也。もしかして精霊エレメンタル・サイトの眼まで使って確認したのかもしれない。

「あれほどのことをする熱意が有った面子なのに一人もいないのはおかしくないか？ 杞

憂であればいいんだが。ちよつと俺、壬生先輩を探してくるよ」

「ああ、いちおう気を付けておけよ」

達也の忠告に頷いてから俺は講堂を出る。一切の迷いなく図書館へと向かった。図書館に着いた頃、轟音が講堂の方から鳴り響いた。事件が始まった。



図書館内部。俺はすぐにテロリスト鎮圧に動くのではなく、彼らが所定の位置に着き、落ち着くまで待った。さすがに二科生とはいえ、複数人の魔法師の目の前に出て鎮圧できるほどの腕はない。

(私を使えば良かったんじゃない?)

CADだの武器だのを消したとしても、相手は非魔法競技の運動部がだいたいだ。体術だけで負ける自信があるぞ。

(そうでしたね。陛下、運動は人並みにできるけど体術や武道はからつきしですものね。ブークスクス)

笑うならその辺を川村家の技術に入れてなかった先代たちにしてくれ。それよりだ。ノアレ、敵の位置を教えてくださいませんか?

ノアレやウィル子は普段魔法師だろうと知覚できない領域からこちらの領域を知覚できる。隠れていない潜伏など意味をなさない。

(二階特別閲覧室に四人、階段の上り口に二人、階段を上り切ったところに二人かしら) ありがとう、助かる。

俺は教えられた場所に、まずは階段上にいる二人に対して汎用型CADに収めた魔法を放つ。

「ぐあっ!」

「がっ!」

威力はさほど強くない雷撃が襲う。彼らはそれで気絶した。

「なんだ!」

「な、何が起こった!」

再度声がした方、上り口の二人に雷撃を放つ。以下同文。

(サー! やりますねえ!)

ありがとうナス。

魔法展開の時間さえもらえれば精霊魔法でこの通りである。ウィル子達のおかげで隠れながら攻撃できるのだから一方的である。

俺はゆっくりと歩を進め、特別閲覧室の電子錠がかかった大扉の前で止まる。

ノアレに、部屋の中の壬生以外の位置を教えてもらい、芸もなく雷撃を放つ。その後ウィル子に頼み、電子錠を解除し、扉を開けてもらう。

（にほほほほ。電子錠なんて脆い鍵、ウイル子の前ではノーロックに等しいのですよー）
ウイル子以外には強固な鍵なんだがな……。

扉が開いた先には、倒れて動かないブランシユ構成員と思しき者3人と、現状を理解できず慌てふためいている壬生の姿があった。

「！あ、あなたがやったの!？」

「まあそうなんですけど。どっちかっていうとそれ俺のセリフなのは」

まるで立場が逆転しているような言い方である。あちらの方がテロリストのはずなのだが。

「壬生先輩、大人しく投降を。他もだいたい鎮圧されてますよ?」

この目で見ただけではないが、正直言つて相手方は魔法師の学校を狙うにしては装備が整っていない。鎮圧は必然だろう。まあそれらは陽動で、特別閲覧室のデータを盗むのが本命だったからだ。こちらの人員はアンテナイトも支給されてる訳である。

「わ、私は、間違つてたつていうの……?」

もはや悲壮感に満ちた面持ちである。俺はそれを見て、哀れさのため息すら零れた。

「貴女の考えが正しいか正しくないかは、もはや問題ではありません。その手法が間違つているのですから。テロまがいの暴力に頼った時点で、ね」

「っ!」

間違いを指摘され、彼女は声にならない悲鳴を漏らす。

暴力に頼った時点で間違いなのだ。それによって一時の成功を収めたとしても、いずれは瓦解する。さらなる暴力で滅ぼされる。

「私は、私は……。……っ」

されど彼女は竹刀を握る。彼女は自身のテロ加担の大義を信じられなかったが、その剣は信じて疑わぬモノなのだから。

「やあああああああ！」

「ぐっ」

彼女の踏込みによる急接近。大上段から頭を狙う一撃。普段の彼女だったら素人に防御を許す程度ではなかっただろうが、彼女の中には行動の迷いがあったのだろう。左腕での防御が間に合った。が、魔法未使用とはいえその道の剣だ。俺を腕の痛みで動きを鈍らせるくらいは容易い。

「はあ、はあ……。っ！」

彼女は俺に追撃をせず、蹲る俺の横を駆け抜けた。

「壬生先輩!？」

外からエリカの声が聞こえる。どうやら達也達が来たようだ。

「エリカ！」

俺がそちらに向かうと、既にエリカと壬生の戦いが始まっていた。達也と深雪は事の成り行きを傍観している。手を加える素振りがないことに俺は安心した。

その戦いは素人目で見て、美しいモノだった。精錬された技は、人の本能にそう感じさせる。人の努力の結晶を称賛させるのだ。長く見ていたいと少し思ったが、残念ながらエリカの最後の一撃で短く終わった。

戦いの後、少し会話して気絶した壬生は達也に運ばせた。達也は俺に押し付けようとしたが、俺は左腕が痛むのももちろん断った。



「なんだ、あたし、バカみたい……。勝手に、先輩のこと誤解して……。自分のこと、貶めて……。逆恨みで、一年間も無駄にして……」

保健室。彼女に対する事情聴取で誤解が解けたが、解けるまでが一人の少女を追い詰めるくらいには長すぎた。

「……無駄ではないと、思います」

達也がそう述べ、壬生の努力を肯定する旨を伝える。彼女は達也にしがみつき、堰を切ったように泣き出した。



壬生が泣き終えた後、ブランシユが背後に聞こえることを聞き出し、攻め入って撃滅する

達也の案を十文字会頭が賛同する。日本支部の所在も表向きはカウンセラーのお小野のはるか遥より聞き出した。

「俺は辞退しますよ」

ブランシユへの襲撃グループの話になった時、俺はそう先に制した。

「怪我人を駆り出すほど、俺たちは非人道じゃない」

「達也はそう理解してくれるけどさ。エリカが睨んでくるんだが」

彼女はこの程度の怪我で音を上げる俺ではないとも思っているのだろうか。そもそも今回ばかりは精霊魔法では分が悪いのだ。エリカは渋々納得し、保健室に居た面々はぞろぞろと退室していく。

「ちよつといい？」

俺も最後尾で退室しようとした時、壬生がそう呼び留める。

「俺に、何か用でも？」

彼女と話す内容はないと思つたが、彼女にはあるようだ。

「まずは、その。ごめんなさい。左腕怪我させちゃつて」

「腫れてる程度ですよ。ひびも入ってません。そつちは、エリカが利き腕にひびを入れたようですし。それで御相子で」

申し訳なさそうに謝っているが、俺はあの事態を予想していた。だから利き腕でない

方で防御したし、事前にウィル子達の行動を制していたので咄嗟に庇いもしなかった。むしろ俺としても襲撃班に加わらない大義名分が出来たので有り難かった。

「ありがとう。それと、どうしても聞きたいことがあったんだけど。結局私って、間違ってたのかなって」

特別閲覧室での際の俺の言葉が引かかっていたようだ。あの時、俺は彼女を否定も肯定もしなかった。

「差別をなくしたいと思うのは正しいと思いますよ？ですけど」

「？」

「貴女の本当の動機はそれではないでしょう？本当はただ、自身の努力を、認めてほしかっただけ。ではありませんか？」

「！」

彼女は驚いて見せたが、徐々に表情を穏やかに戻した。

「そうね。そうだったと思う。だって、司波君に認められた時、とっても嬉しかった」

「ええ、それも悪いことではありません。誰もが認められたくて、もがいてるんですから。でも貴女はもつと早く気付くべきでしたね。貴女のことを、ずっと認め続けている存在に」

彼女はまるで意味が分かっていないようだが、それは短い病院生活で気付かされるだ

ろう。俺の口から述べることではないので、俺はそれ以上何も言わず退室した。

後に、ブランシユ日本支部が無事壊滅したことを達也から聞いた。事後処理は十文字会頭が十文字家の権力でどうにかしたようだ。

第7話 幹木にまさる梢木なし

2095年7月10日

4月のお疲れ会兼達也誕生日会に俺も参加したが特筆することはなく、とても平和な高校生活を送った約二カ月。期末テストの結果も昨日公表され、総合19位だった俺は特に目立つこともなく迎えた平穏なる日曜日。俺は高尾山の人気の一切ない林にいた。

「なんか、俺ってヒデオってどうかマヒロみたいになってる気がしてきた……」

末恐ろしいほど弁舌と彼の優しさに集う仲間の力で乗り越えるヒデオと、大嘘も含む猛毒の話術と突拍子もない奇策で乗り切るマヒロ。個人的な見解だが、俺の立ち回りはマヒロに近いものがある気がした。よく考えればどちらにも似ていない気がしてきたのは気のせいだ。

「マヒロって言うത്サーが言っていた『ミスマルカ』の主人公ですか？うーん、ウィル子達はその子を詳しく知らないの何とも言えないのですよ」

比較ができないと困っているウィル子。彼女たちには是非とも林トモアキ作品を読んでほしいとこの世界でも探したが、なんと『ミスマルカ興国物語』や『戦鬪城塞マ斯拉ヲ』『レイセン』だけでなく『ばいおれんす☆まじかる！』『お・り・が・み』『ヒマワ

リ：unUtopial World』も、今にも過去にも存在しなかった。もちろん『魔法科高校の劣等生』でもある。そのほかの作品は、俺の知る限り存在していた。

「ヒデオつぼくない、ていうのはよく分かるわね。ヒデオは良くも悪くも自信がなかったのよね」

「なんかそれだと俺が慢心しているみたいに聞こえるな……」

否定はしきれないのが痛いところだ。今のところ大筋は原作通りの進みに、ウィル子とノアレ。未来の知識がある上にチート持ち。油断は身を亡ぼすと分かっているながらもそうなってしまうのは仕方ないと思う。気を付けよう。

「別に無理してマスターつぼくなる必要はないと思いますよ？サーはサーで、しっかりと殺傷は避けてますし、サーなりの良さがあるのです」

「私としてもヒデオとは違った面白さを感じてるから、別に今のままでいいんじゃない？」

二人は特に現状、否定意見は持っていないようだ。むしろ、俺がヒデオのように振る舞おうと無理をするのではないかと心配しているようにうかがえる。

「まあ、それもそうか。改めて考えれば、ヒデオはヒデオだったからあんな風にたち回れたわけだしな。ま、今後とも非暴力を胸に頑張りますか」

ヒデオのように振る舞えないにしても、俺はヒデオの意思にはしっかりと同調した

い。それがウィル子達を授かった俺の義務であり権利である。

「頑張るのですよ、サー」

「頑張りなさいな。つて」(ウィル子。人がきたみたいよ)

(意図的にここに来たならば、彼でしようか)

二人は人の気配を感じし、視認されないように神霊の領域に引つ込んだ。俺の背後から足音が近づいてくる。そちらを向けば、何だか懐かしく思える顔があった。

「……英人」

「久しぶり、幹比古。しばらくお前と話せなくて寂しかったぞ」

俺がそんな風にはにかんで見せても、幹比古の表情は冴えない。

「英人、君に訊きたい。現代魔法の知識は、精霊魔法に有益なのか、どうなのか」

真剣なまなざしで此方を見つめる幹比古。未だに彼はスランプに苦しめられ、そこからの脱却に現代魔法の知識を用いようとしていた。だが、この三カ月。魔法理論の試験で3位を収めながらも、その結果は彼の魔法に全く反映されていない。

「まだ学び始めて3カ月。入学のための独学含めても3年も学んでいないんだ。有益かどうか決めつけるのは早計だな」

それが俺の率直なる感想だった。確かに、物理学に特化した現代魔法では、スピリチュアルな分野の精霊魔法とはなんら関わりが無いように見える。だが、精霊魔法のプ

ロセスは既に解析されている。それ故に、CADで精霊魔法が発動できるのだ。

「だけどー！」

「幹比古。いくら知識をかき集めたところで、お前のその不調は治らないぞ」

「!?!」

ある意味彼にとつてこの言葉は絶望させる呪詛だろう。「今までの努力は無駄だ。お前のそれは不治だ」と言われてるように彼には聞こえるはずだ。

「前提を間違えてるんだ。欠けた何かを埋めようとしても、他の何かで代用しようとしても、埋まるわけがないんだ」

「僕には、そもそもそこまでの腕はないって。君は言いたいのかい……う？」

彼は静かに憤っていた。かつて神童と言われた者のプライド。既にズタボロだが、なけなしでも彼の拠り所だ。本当に、どうして一人でここまで追い込んでしまうのだろうか、つい哀れに思えてしまう。

「幹比古、お前は独りじゃない」

「……どういいう意味？」

悲しげに笑う俺の意思を、彼は読み取れない。

「お前が今のお前を認められなくても。俺は今のお前を認めてるんだ」

「……」

彼はまだ分からない。

「お前が如何に神童じゃなからうが、お前が如何に二科生ウイードと誇られようが。お前は天才だ。俺が、それを信じてる」

「そうだ、俺は彼を信じている。彼が『吉田幹比古』だからとか、『メインキャラクター』だからとかじゃなく。彼が俺の親友だから、俺は彼を信じ続けている。

「僕は……」

「二人で悩むな、幹比古。俺にも、一緒に悩ませろよ」

俯く彼に、俺は右手を差し出した。

「……ああ、分かったよ」

諦観というべきか、俺からは逃げられないと諦めたように俺の手を握り返した。

「まあそれはそれとして」

「え？ぐふっ」

握られた手を引っ張って引き寄せ、彼の腹部に拳をねじ込んだ。

「英人……」

（無言の腹パン）

（彼は英人ではない）

構図もセリフのタイミングも完璧だったが、俺は英人だし、彼は決闘者デュエリストじゃない。

「半年以上親友を放置したのはそれでチャラにしてやるさ。よし、じゃあ親友らしく俺をなぐぐぼわあっ！」

蹲っていた彼は立ち上がると同時に俺に腹パンをし返した。

(見事な作画崩壊。パンチね)

(作画なんて) ないです。

「これでいいんだろう、英人」

「ああ、その通りだ……」

腹を抱えて蹲る俺は彼の爽やかな笑顔を見上げた。

「さて、お前のスランプ脱却計画を練る前に。エリカだな」

「エリカか……。彼女、怒ってるよね」

何を今更と言いたくなるが、今から拗ねているエリカの機嫌への対処を考えると、彼

とともに苦笑いを禁じ得ない。

「まあ、財布がちよつと軽くなるのは覚悟しとけ」

「ちよつとで済めばいいけど……」

第8話 バーボンハウス

やあ（・・ω・・）

ようこそ、『魔法科高校の益良雄』へ。

このテキーラはサービスだから、まず飲んで落ち着いて欲しい。

うん、「続きがない」んだ。済まない。

仏の顔もって言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。

でも、この小説を読んだ時、君は、きつと言葉では言い表せない「ときめき」みたいなものを感じてくれたと思う。

殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい。

そう思っつて、この小説を投稿したんだ。

じゃあ、注文を聞こうか。

はい。本当に申し訳ありません。怒られる前に私が何故これを投稿したかを述べさせていただけます。箇条書きのところだけで大体は分かると思うので、詳細は読みたい方に読んでもらう方向で。

○書き溜めを放置するのは勿体なかったから

私は時折面白そうな構想が出来たら「まずある程度書いてみる」という事をしているんですが、この『魔法科高校の益良雄』はなんと6話まで書き上げられ、7話は中途半端な形ですが書き溜められていました。おそらく続きは書かないだろうけど、せっかく書いたのに放置するのもあれだから「いつそ投稿してしまえ」となった次第です。

○『戦鬪城塞マストラ』、『レイセン』等、林トモアキ原作の二次創作が全然なかったから

林トモアキ先生の作品は私とても気に入っているんですが、まあうん。二次創作が全然ありません。無ければ書けばいい。書いた結果がこれです。

○自著の別作品が休止中の慰めのもののため

私はこれ以外に『魔法科高校の編輯人』という作品を書いています。そちらは私一人で一カ月ほど休止しているのですが、その間何も投稿しないのは寂しいというか何というか。そんな自身への慰めと、投稿を待っている人たちへの慰めとして投稿しました。

次は続きを書かない理由をば。

○『魔法科高校の編輯人』で手がいっぱいだから

私も残念ながらリアルがあり、暇ではありません。そして、私は出来る事ならば『魔法科高校の編輯人』を完結まで書き上げたいと考えています。そんなところに他の作品

まで執筆しようものなら、いつまで経つても終わらないし、完結までモチベーションがもたない可能性が高くなります。そのために、別作品の執筆は諦めています。

○チート主人公は書くモチベーションが上がらなかつたから

正直に言つて、本作の主人公は間違ひなく「最強チート」です。ウイル子とノアレでチートするのをコンセプトとして書き始めたのだから当たり前なのですが。思つた以上に執筆中違和感を覚えました。「なんでこの主人公なんも苦労してないのにこんなチート持つてんの？」つて。私は強力な力にはそれを持つ理由があると考えています。故に、チートは「血みどろの努力の末」もしくは「険しい運命の約束」等が必要だと思つています。残念ながら本作主人公はどちらも持ち合わせる事ができませんでした。

それと、念のためですが。別に私は「チート転生モノ」が嫌いなわけではありません。ただ、「自分で書くこうとすると書けない」だけです。

非常にご勝手ながら、以上の理由で本作の執筆は行いません。本当に申し訳ない。

では、またどこかで。